

台湾茶の歴史を訪ねる 第十回



(10) 高山茶の生産地を歩く

須賀 努 (コラムニスト / 茶旅人)

高山茶の歴史の話が続きたい。前回は書かなかった大切な点として、『なぜ高山茶という商品が生まれたのか?』ということがあるかと思う。既に2017年9月号『知られざる凍頂烏龍茶の歴史』でも述べたように、1970年代前半に台湾茶は『輸出から内需へ』という大きな転換期を迎え、『台湾人の所得向上に合わせて、台湾人が好むお茶が求められていた』ということが背景として挙げられるだろう。凍頂烏龍茶というブランドの成功を受け、人々はどんどん希少価値のある高山茶を求めていったようだ。今回は各茶産地を訪ねて聞いたその歴史と現状について簡単に報告したい。

大禹嶺と華剛

前回梅山龍眼村がいち早く、高山茶作りに着手したと書いたが、当時を知る人から、『あの頃は米も花もダメで、生活が厳しく、多くの村民が村を離れて出稼ぎに行っていたから、茶作りを始めたと言っても、人は殆どいなかった。その頃、農林庁は金針花(ワスレグサ)畑の跡地に10ヘクタールの試験茶園を設置し、その支援などもあり、何とか少量生産が始まった』という補足を受けた。実際梅山県誌によれば、梅山で公式統計上、茶葉が生産されたのは1983年からになっており、そ



豊原 泉芳茶荘の杜家親子

の後急速に産量が伸びている。

梅山と並んで早くから高山茶が作られたのは、大禹嶺だと言われている。1923年創業、豊原の老舗、泉芳茶荘に4代目の杜西銓氏と奥さんの陳秀藝さん、そして5代目杜蒼林氏を訪ねた。泉芳茶荘は1代目が1918年頃に茶の商売を始めた、まさに百年老店であるが、その歴史は決して順風満帆だったとは言えない。

豊原は材木事業などで比較的裕福な人が多く、昔からお茶を飲む習慣が一部にあった街と聞いている。だが2代目杜江水氏は日本時代に茶業展開のためシンガポールなども渡り歩いたとも言われ、その後台湾で総督府に睨まれ、長年投獄されたこともあったという。光復後、研究熱心な2代目は3代目杜煥璋氏と共に全台湾の茶区を訪ね歩き、苦勞を重ねて茶園の生産管理、茶の製造技術の習得に努めたという。ここで見せられた古い写真、それは1970-80年代に3代目と若き4代目が大禹嶺の初期開拓に勤しんだものだった。当時は道もなく、山に入るのも大変だったようだ。

話によると、1969年頃から、大禹嶺105k付近に茶樹を試植したが、すぐにはうまく育たなかったらしい。地主の陳金地氏はそれまでは梨など果物を栽培していたが、失敗にもめげずに果樹畑の



大禹嶺 4年前の春の茶摘み

間に試植を続け、1976年頃から本格的に軌道に乗り出したという。当時の高山は今より寒く、品種を変えて試す中、青心烏龍が良い結果を生んだ。このタイミングは前回紹介した梅山とほぼ同時期に当たり、どちらが先かというより、その頃数か所で一斉に高山茶の生産が始まったと言ってよいのではないかな。

この開発には地主の陳氏、そして杜家の他、鹿谷の陳恵読、陳金堆親子（1979年鹿谷コンテストでトップを取った）も参加していた。陳親子は鹿谷でも有名な茶作りの名手だったと言い、実は陳秀藝さんの父と兄だと聞き、何となく合点がいった。このプロジェクトは豊原の名茶商と鹿谷の名手の合作プロジェクトであり、当時新しいお茶が求められていた茶商と、茶の作り手の大いなる挑戦だったということだ。

現在の鹿谷農会・陳文益理事長は後述する福壽山農場に長く製茶師として請われ、竹山・鹿谷一帯から摘み手と茶師を率いて山を登ったと聞く。彼は泉芳茶荘の陳秀藝さんの甥に当たるといい、やはり大禹嶺の茶作りに早くから参加していた。この永隆の陳家は鹿谷茶業の華麗なる一族と言えるのではないだろうか。

ただ生産が進んだと言っても、大禹嶺での茶作りは、茶樹の栽培、そして産量においても困難を

極めたという。1980年代前半、凍頂烏龍茶が隆盛を極める中、コストが非常に高い高山茶を売るには相当苦労した、と杜西銓氏は懐かしそうに教えてくれた。因みに大禹嶺茶と呼ばれるのは、狭義には100-105kを指すが、広義には90-110kあたりまで含んで呼んでいる。標高は2,000-2,500m程度であるが、その土地の傾斜は極めて厳しい。

その後、福壽山や梨山地区でも高山茶がスタートする。そして泉芳茶荘でも、4代目が1990年代に新たに華崗に製茶場を建設する。華崗は大禹嶺から車で30分程度のところにあり、長年の研究の結果、寒暖の差が大きく、霧が出る場所として、茶作りに適していると判断したという。筆者も数年前に4日ほどここに泊まり込んだことがあるが、連日朝は霧が出ており、5月末だというのに最低気温は10度を下回る寒さで、かなり寒くて困ったことが鮮烈な印象として残っている。

現在の茶工場は大量生産が可能であり、太陽が出なくても茶作りが出来るように工夫されていた。梨山、天池、福壽山、この地区で茶に関わる誰もが知る大工場であり、高山茶ブームを牽引した、一つの象徴のような場所となっている。現在茶作りをしている原住民も、昔はまず華剛と取引するかどうかを考えた、と何人もから聞いた。

尚、現在の大禹嶺105kは台湾で最も高い茶畑



華崗にある華剛製茶廠

(標高 2,300-2,600m の山の急斜面に茶樹が植えられていた)と言われていたが、2015年に開発者の一人、陳金地氏の親族の訴えも空しく、政府により茶樹が伐採され(土地が公有地であったため)、現在は植林が行われているが、台刈りされた茶樹から僅かに芽が噴き出しており、往時を偲ばせている。

福壽山農場

埔里から車で山を登る。霧社、清境農場、翠峰などを越えていくと、中横公路の最高点、武嶺(標高 3,275m)に着く。天気良ければ、周囲の山並みが一望でき、雲の流れが美しい。そこから下ってトンネルを抜けると、大禹嶺、梨山を通り、福壽山農場に到達する。今やリゾート地として人気が高く、別荘のような高級ホテルの部屋に宿泊する。

福壽山農場で巫嘉昌場長に話を聞き、資料を頂いた。農場は退役軍人の受け皿として、高山の開発、農業支援を目的に、1957年に開業(清境、武陵と並ぶ三大農場)、リンゴなど果物栽培を行っていた。1979年に起こった台湾のWTO加盟により、台湾産リンゴ価格が暴落して、業種転換を迫られ、ちょうど他地域でも始まっていた高山茶が代替品に挙がった。

因みに今でも農場周辺にはリンゴ畑が目につき、農場内には世界各地のリンゴの木を交配した大木まで存在して、観光客を楽しませている。高山蜜リンゴは、今や非常に人気があり、価格も高い。尚、茶畑はリンゴ畑より上の方にあり、農薬などの混入にはかなり神経を使っている。

1980年に茶業改良場・呉場長の指導などにより茶樹の試樹が始まるも、霜害などで半分は失敗に終わる(その後は霜害に備え、日本製の防霜ファンを導入した。現在は多くが台湾製に替わっている)。それでも試樹を続け、1983年正式に福壽長春茶のブランドで生産を開始した。摘む時期が6月と10月、他の茶園とは時期がずれており、茶摘みおばさんたちが避暑を兼ねて遊びがてら摘みに来るので人手は今でも確保できるのだという。

青心烏龍、武夷、鉄観音の三種類が同時期に植えられ、現在まで残っている。茶畑は農場事務所よりかなり上にあり、標高は2,200-2,500mが中心。現在は当初の3倍以上に茶畑面積が増えている。高地の茶葉はゆっくり大きく育つため肉厚のものが多く(ベトナム産などは薄い)、他の高山茶と比べ、発酵を少し高めにして、焙煎も強い。伝統的凍頂式製法に近い味を保持しており、金黄色で渋みがなくほのかな甘み、花香より果香という特徴がある。



福壽山農場の茶畑



福壽山農場 巫嘉昌場長

狭義の大禹嶺茶が無くなった現在、福壽山農場の高山茶は価格も標高も台湾一高いとも言われている。農場で正規に売られる価格は7,000元/斤(鉄観音、烏龍)となつてはいるが、産量が春9,000斤、冬7,000斤と非常に少なく、まさに高山茶の特徴である希少性の代名詞のようになっており、偽物も多数で回っている。

農場ではQRコードを付け、即座に判別できるように工夫するほど、厳正な商品管理を徹底しているが、一般市場の相対取引ではその数倍の値が付いているとも言われている。因みに巷で売られている多くが福壽山の茶であり、福壽山農場の茶ではないことにも注意が必要だ。ある茶業者は現在の茶園が別の山の国有地にあるため将来を不安視して、福壽山あたりの私有地を新しく購入して、高山生産を継続していくという。福壽山のブランドがあれば、茶は売れると言っていたが、果たして今後はどうだろうか。

霧社と廬山温泉

1989年、廬山温泉に1泊したことがある。その時まで、霧社や廬山がどのようなところで、日本統治時代に何があったかについて、全く知識がなかった。霧社事件の様子をその当事者から直接聞いて初めて学び、強い衝撃を受けた。その頃は台湾経済も好調で、温泉は凄く賑わっていたと記憶しているが、現在は地震や水害により度々被害を受け、ひなびた温泉街という雰囲気が漂っている。

30年前はお茶に興味がなかったので見過ごしていたが、その頃既にこの付近でも高山茶が作られていた、と知ったのは最近だった。大手の天仁銘茶が高山茶作りに着手した場所、それが霧社と廬山温泉だったのだ。今回は最初に天仁と契約したという原住民農家を訪ねてみた。

しかし訪ねた場所では既にお茶は作られていなかった。『今は茶を作っている農家は少ないよ。



廬山温泉最初に天仁と契約したセデック族
アーウィー・ムートーさん(左)

皆高原野菜に転向した。うちもそうだ』と言ったのは、セデック族のアーウィー・ムートーさん(中国語名：施春明)だ。『1981年、天仁がやってきて、茶を作って欲しいと言われたが、実は原住民は基本的に茶を飲まないし、この辺に茶樹もなかった。最初は戸惑った』という。だが植えれば儲かると言われ、梨畑の1ヘクタールを茶畑にして、青心烏龍を植えた。

成長した茶葉を摘んで、その生葉を天仁に渡すだけで、いい収入になり、それが評判となり周囲も皆、茶畑を始めた。渡した茶葉は鹿谷から来た茶師が凍頂式で製茶して、天仁が『天廬茶』という名称で、大々的に売り出して、好評を博し需要も伸びた。その後茶業は順調だったが、高山茶の茶畑の位置がどんどん高くなり、10年ぐらい前には、1,100m程度のこの地域の茶葉は安値でしか引き取られず、採算が合わず淘汰が始まってしまう。この近辺の原住民が茶業から野菜作りに替わって行ったのは、自然の流れだろう。今でも続いている茶農家は標高1,500-1,700mに茶畑を持っているところだけらしい。

因みに霧社より少し下の地域にもセデック族は住んでおり、以前大同山という場所の茶畑を訪ねたこともあった。やはり1,000m付近にあった茶



茶畑の無くなった大同山から霧社方面を望む

畑はほぼ壊滅しており、温室が作られ、野菜栽培に切り替わっていた。1,500mの頂上付近まで行くと、きれいに管理された茶畑が残っていたが、そこは30年前に平地の台湾人に売却してしまった土地だという。原住民の土地開発などでは過去色々トラブルもあったようだ。

霧社にも寄ってみた。街の真ん中、公路沿いに陽光茶園はあった。こちらは天仁の天霧茶（高峰などで作られた）の成功を見て、1985年に奇来山付近の標高1,800mに茶畑を開拓して、茶作りを始めたという。茶苗を何とか取り寄せ、製茶技術も一から勉強して、今日までやってきた。

ここの創始者は現在97歳の陽大烈氏。自らお



霧社 陽光茶園 陽大烈氏

茶を振る舞ってくれるほど元気で、とてもこの年齢には見えなかった。陽氏はこれまでに話を聞いてきた茶業者とはちょっと違った経歴で興味を惹かれた。実は生まれは中国湖北省の武漢だという。国共内戦後、香港に出て仕事をし、1953年になって台湾に渡って来た。そして政府関係の仕事で山に入り、ずっとここで生活していた。

1985年に退職を迎え、何か別の仕事をしようと思った時に出会ったのが高山茶だったという。その歳になって、新しいことを始めようという気概が凄い。現在は年の離れた奥さんや娘さんがお店を切り盛りしていて、茶業はずっと続いており、先日も台北南港の茶展に元気な姿を見せていたのが、人目を引いていた。高山茶作りには原住民や外省人など、それまで茶業と関係のなかった様々な人々が関わったことが分かる。

杉林溪

これまで高山茶の茶区として、梅山、阿里山、大禹嶺、福壽山、霧社・廬山などを訪ね歩いてきた。日本時代に遡る話を別にすれば、ほぼ同時期に高山茶が作り始められたことが分かり、そこには個々の特色ある歴史はそれほど見えてこない。恐らくは同じだろうなと思いながら、もう一つの代表銘柄である、杉林溪にも足を延ばしてみた。



杉林溪について語る陳能輝氏夫妻

杉林溪の龍鳳峽で3番目に茶作りを始めたという陳能輝氏を訪ねた。龍鳳峽は以前竹林だった。作物と言えば、少しの米とバナナぐらい。最初に茶樹が植えられたのは1982年頃だったという。思ったより早いはその量はほんの少しだったという。その後1986年に付近の竹林で火災があり、その処理策として林地に茶樹を植えることが許されたという歴史もあるようだ。ただ傾斜が30度以下の土地、という制限がついていたというのだが。

実際に竹山から車に乗り約1時間、鹿谷、溪頭を経由すると、標高1,700m前後に茶畑が見えてくる。風景としては良いが、かなりの急傾斜地に茶が植えられているように見える。恐らくは傾斜30度を守っていないのでは、と思われる茶畑もある。そんな中で地元の女性たちが黙々と茶葉を手摘みしていた。ただ午後霧が濃くなり、作業は打ち切れ、皆送迎車に乗せられて帰っていく。

1990年前後、杉林溪では高山茶の大量生産が始まり、1995年頃からの10年間で最盛期だったという。ここは土壌が良く、挿し木で増やしても根付きが良く、良質の茶葉が採れたことが発展につながった。当初は青心烏龍で、凍頂式の高発酵茶を作っており、世の流れで軽発酵にシフトしていくが、基本的に他の高山茶を比べても、値段は安



杉林溪の茶畑

定している方だともいう。

1999年の地震以降、鹿谷付近の茶畑はどんどんなくなっていき、杉林溪付近にシフトが進んだようだ。出来る限り、高山茶ではなく、伝統的な凍頂烏龍茶を作っていきたいという考えの茶農家もあったが、徐々に高山茶に押されていく。確かに香りは良いが、本当に消費者は香りだけを求めているのだろうか。

今回高山茶の生産地を幾つも訪れたが、その将来性に関しては正直問題山積という印象を受けた。ここ40年以内に急速に発展した台湾高山茶だが、今、危機が訪れているともいえる。次回はそのあたりを紹介していきたいと考えている。